

世親に知られた數論說

——特に俱舍論に於て——

田 村 庄 司

數論は外道諸派中最も勢力があつた關係上、勝論と共に外道の驍將として、佛教側からは常に破邪顯正の第一對象であつた。従つて佛典の諸所に數論のことが述べられてゐる。茲では世親の特に俱舍論 *Abhidharmakośasāstra* のそれに就て考えてみよう。

やゝ、世親傳によれば、世親は七十眞實論 *Paramārtha saptaśati sāstra* を造り、數論師頻闍訶婆沙 *Vindhyavāsa* の宗義を摧破したとある。⁽¹⁾ この傳説の眞偽はともかく、尠くも世親當時數論がかなり盛んで、しかも世親自らもこれを良く知つていたものと考えられよう。かつて高楠博士は、この世親傳及び唯識述記等を詳細に検討され、頻闍訶婆沙と自在黑 *Isvara-kṛpā* とは同一人との考證に基づき、世親の年代を 420-500 A. D. 自在黑は 480 A. D. より以前、つまり世親と同時代か、同時代の先輩であると論證され、數論と佛教との關係に重要な手懸りを與えた。宇井博士も多分の疑問を示しながらも頻闍訶婆沙と自在黑との同一人説を採り、自在黑の年代を世親と同時代か、或は同時代の先輩、但し世親の年代を 270-360 A. D. とするから、自在黑の年代は 260-350 A. D. として大過なしとされた。⁽²⁾ 斯様に世親の年代に相異があつても、兩博士の同一の論定、——自在黑が世親と同時代か、或は同時代の先輩との論證が許されるとすれば、世親は已に自在黑に就て知るところがあつてよい筈である。自

在黑は數論頌 *Saṃkhyakarika* を著し、五頂 *Pañcasikha* 以來複雜を極めた當時の數論說を整理組織し、從來の數論に一定の方向を與え、他派と明瞭に區別する一線を劃し得たようなものであるから、世親の破邪顯正の論鋒は數論に關する限り自在黑及び彼の數論頌にこそ向けられるべきではなかつたか。斯くしてこそ世親傳の傳説も首肯し得よう。所が、石に化した數論師の宗義を破したのは陳那であるとの説もあり、陳那が數論を破した書を作つたことは自らいふところで、文獻上世親傳よりも信用がをける。⁽³⁾ 従つて七十眞實論の如きは一概に世親のものとして斷定出来ないであらう。果して世親には直接自在黑及び數論頌に就て言及したところが見當らないようである。因みに俱舍論にある數論と關係ありと思はれるもの全てを摘出し、考えてみよう。

(1)、語具等をも應に立てて根と爲すべし。語・具・手・足・大・小便處は、語と執と行と棄と樂との事の中に於て、其次第の如く増上有るが故に。(卷第三)

これは外道の根設定の立場より述べたもので、大毗婆沙論に「數論者は説く、十一根あり、五覺根と五業根と意とをいう。五覺根とは、所謂、眼・耳・鼻・舌・身根にして、五業根とは語・手・足と大小便根とをいう。意とは意根にして第十一根と爲す」(卷第一四二)とあるから、俱舍論のそれは數論の十一根説を破さんとしたものであることが明かである。⁽⁴⁾

(2)、一切世間は唯だ上に説く所の如き諸因と諸縁とより起さるるなり。自在天・我・勝性等の一因の起す所に非ず。(卷第七)

この勝性とは數論の *prakṛti* (*pradhāna*) のことで、世親は數論の轉變説 *pariṇāmanavāda* を唯だ勝性 *pradhāna* 一元による轉變と解

していたようである。⁷⁷⁾

(3)、數論は云何に轉變の義を執するや、謂く有法たる自性は常に存して、餘法生ずることあり、餘法滅することありと執す。是の如き轉變は何等の理と相違するや。謂く必ず有法の常住なるに、別に法の滅し、法の生ずること有り⁷⁸⁾と執すべきことある容き無ければなり。誰か法の外に、別に有法ありというや。唯、即ちこの法の轉變する時に於て異相の所依たるを名けて有法となすのみ。此れも亦理に非ず。非理とは何ん。(自性は)即ち是れ此の物にして而も此の(物)の如くならずという。是の如き宗義は曾て未だ聞かざる所なり。(卷第一〇)

そして世親は法救 Dharmatrāta の三、世類別、説を批難して、(4)、法に轉變あることを執するが故に、數論外道の朋の中に置くべし。(卷第二〇)

と、大毗婆沙論に「諸行の相續して轉する時前位は滅せずして轉變して後となるが如し」(卷第三九)斯る説に執するものが轉變外道で、數論がその代表であつた。そこで世親は「雨衆外道(數論)の邪論を顯成すべし」(卷第二〇)と云つた。

(5)、彼は是の説を爲す。有は必ず常有なり。無は必ず常無なるべし。無は必ず生ぜず。有は必ず滅せず。(卷第二〇)

有は無より生じない。有は有からのみ生ずるとする因中有果論の根本論理を示したもので、數論の論理體系——轉變説は全くこの論理的基盤の上に立てられて⁷⁹⁾いる。従つて世親の破邪顯正の多くはこの轉變説の、特に因中有果論に對してである。世親は現在に種々相があるのは業のためであるとの考えを豫想して、それを論難する。即ち、(6)、若し能く果をして現在と成らしむと謂は如何にして果を現

在に成らしむるや。若し引いて餘の方所に至らしむることなりと謂は、則ち所引の果は其の體常なるべし、又無色の法は當に如何にして引くべきや、又此れが引く所も(その)體は本無なるべし。若し但だ體をして差別有らしむるなりと謂は本無くして今有るというその理は自ら生ぜん。(卷第二〇)

と。世親の論難の態度をよく示している。俱舍論ではこれだけであるが、これらは全て破邪顯正の論鋒にかけられたもので、素直な態度で述べられたものではない。これらだけからでは到底世親に知られた數論など考察出来る段階ではないけれども、以上の事から知られる得る凡そを簡單に考えてみよう。世親が特に破邪顯正の對象となしたのは、因中有果論に基づく轉變説であつた。しかしそれは數論独自の轉變説ではなく、むしろ世親は自性二元の轉變説として數論を解していたようである。これは轉變外道といへば、當時の傾向として直ちに數論に結びつけて、他派のものも混じて共にそれらを豫想して論破した、その態度によるのであらうか、或は世親が解した數論そのものは己にそういう傾向のものであつたのであらうか世親は數論を雨衆外道と呼んでいる。雨衆は數論の一派の⁸⁰⁾上首 Vātsīdya Sarva のことで、彼は世親傳の僧伽論に通曉した龍王毗梨沙伽那で、頻闍訶婆沙は彼の秀れた弟子であつた。所で、大毗婆沙論では數論を五頂外道としているから、⁸¹⁾その編纂當時數論は五頂 Pañcāstika によつて代表されていたのであらうか。それが世親に至つて雨衆 Vātsīdya の名で代表せしめられた程であるから、彼は餘程秀れた學者であつたのであらう。茲で結論的にいへば、俱舍論に關する限り世親に知られた數論は、毗梨沙伽那及び頻闍訶婆沙のそれで、それはむしろ自性一元による轉變説と解されやすいもので

あつた。従つて世親は未だ從來の數論の諸説を整理し、數論独自の立場を確立した、Purusa, Prakriti の二元のもとに組織體系された自在黒のそれを知らなかつた。とすれば世親傳や陳那のこと等を勘案するとき、むしろ頻闡訶婆沙と自在黒とは別人で、そして自在黒は世親以後の人であらうと考えることが出來よう。結論があまりに飛躍してしまつたけれども、これについては何れ後の機會に詳細にすることがあらう。

- 1 山本快龍・自在黒年代論 526-7. pp.
- 2 木村泰賢・印度六派哲學 120-1. p.p.
- 金七十論備考卷上、この論を破したものを世親ではなく陳那と
している。
- 3 山本快龍・宗教研究新第八卷第二號 92-3. pp.
- 4 宇井伯壽・印度哲學史 446-7. pp.
哲學雜誌三七九號、69. p.
- 5 宇井伯壽・印度哲學史 446-7. p. p.
- 6 Saikhya Karika V. 26
- 7 國譯一切經・俱舍論(西義雄譯) 312. p. 註八二參照
- 8 Saikhya Karika V. 9.
- 8 國譯一切經俱舍論 832. p. 註一〇四參照
- 10 金七十論備考卷上
- 宇井伯壽、雜誌三七九號、69. p.
- 11 大毗婆沙論卷第一八一

新刊紹介 (二)

福原亮嚴「有部阿毘達磨論書の發達」

序 論

- 第一章 阿毘達磨の源流
- 第二章 部派佛教の成立
- 第三章 說一切有部の成立
- 第四章 阿含經と說一切有部
- 第五章 有部論書の中國語譯

本 論

- 第一章 初期における論書
- 第二章 中期における論書
- 第三章 後期における論書
- 第四章 未傳の有部系論書
- 附錄 阿毘達磨大毘婆沙論條目

A 5 版 本文五二八頁 附錄六八頁
索引四六頁 英文要旨四七頁
永田文昌堂刊 定價三、八〇〇圓